

誓之卷

泉鏡花作

\*\*\*\*\*

目次

團欒

石段

菊の露

秀を忘れよ

東枕

誓

\*\*\*\*\*

後の日のまどゐは樂しかりき。

「あの時は驚きましたたつけねえ、新さん。」

とミリヤアドの顔嬉しげに打まもりつゝ、高津は予を見向きていふ。ミリヤアドの容體はおもひしより安らかにて、夏の半一度その健康を復せしなりき。「高津さん、ありがたう。お庇様で助かりました。上杉さん、あなたは酷い、酷い、酷いもの飲ませたから。」と優しき、されど邪慳を装へる色なりけり。心なき高津の何をか興ずる。

「ねえ、ミリヤアドさん、あんなものお飲ませだからですねえ。新さんが悪いんだよ。」

「困るねえ、何も。」と予は面を背けぬ。ミリ

ヤアドは笑止がり、

「それでも、私は血を咯きました、上杉さんの飲ませたもの、白い水です。」

「いゝえ、いゝえ、血ぢやありませんよ。あなた血を咯いたんだと思つて心配して在らつしやいますけれど血だもんですか。神経ですよ。あれはね、あ

「あなた、新さんの飲ませた水に着て在らつしやつた襦袢のね、眞紅なのが映つたんですよ。」

「こじつけるねえ、酷いねえ。」

「何のこじつけなもんですか。眞個ですわねえ。」

「ミリヤアドさん。」

「ミリヤアドは莞爾として、」

「何うですか。ほゝゝ」

「あら、片鬚屑を遊ばしてからに。」

「と高津はわざとらしく怨じ顔なり。」

「何だつて然う僕をいぢめるんだ。あの時だつて散々酷いめにあはせたぢやないか。亂暴なものを食べさせるんだもの、綿の餡なんか食べさせられたのだから、それで煩ふんだ。」

「おや／＼飛んだ處でね、だつてもう三月も過ぎましたぢやありませんか。疾くにこなれてさうなものですね。」

「何、綿が消化れるもんか。」

「ミリヤアド傍より、」

「喧嘩してはいけません。また動悸を高くしま

す。  
「

「ほんとに串戯は止して新さん、きづかふほどのことはないのでせうね。」

「いゝえ、わけやないんださうだけれど、轉地しなけりや不可ツていふんです。何、症が知れてるの。轉地さへすりや何でもないつて。」

「そんならようござんすけれど、而して何時の汽車だツけね。」

「え、もうそろ／＼。」  
と予は椅子を除けてぞ立ちたる。

「ミリヤアド。」

ミリヤアドは頷きぬ。

「高津さん。」

「はい、ぢや、まあいつていらつしやいまし、もうねえ、こんなにおんななすつたんですから、ミリヤアドのことはおきづかひなさらないで、大丈夫でござんすから。」

「それでは。」

ミリヤアドは衝と立ちあがり、床に二ツ三ツ足ぶみして、空ざまに手をあげしが、勇ましいき面色な

りき。

「こんなに、よくなりました。上杉さん、大丈夫、駈けて見ませう。門まで、」

といひあへず、上着の片襖掻取りあげて小刻に足はやく、颯と芝生におり立ちぬ。高津は見るより、

「あら、まだそんなことをなすツちやいけません。いけませんよ。」

と呼び懸けながら慌しく追ひ行きたる、あとよりして予は出でぬ。

木戸の際にて見たる時ミリヤアドは呼吸忙しくたゆげなる片手をば、垂れて高津の肩に懸け、頭を少し傾け居たりき。

石段

「いゝめをみせたんですよ、だからいけなかつたんです。あの當時しばらくは何ういふものでせう、其はね、眞個に嘘のやうに元氣がよくおなんなすつて、肺病なんてものは何でもないので。こんなわけのないものはないツてつちや、室の中を駈けてお歩行きなさるぢやありませんか。さうしちやあね、（高津さん、歌をうたツて聞かせよう）ツてあの（なざれの歌）をね、人の厭がるものをつかまへてお唄ひなさるの。唄つちや（あゝ、こんなぢや洋琴も役に立たない、）ツて寂しい笑顔をなさるとすぐ、呼吸が苦しくなツて、顔へ血がのぼつて來るのだから、そんなことなすツちやいけませんツて、いつでも寝さしたんですよ。

しかしね、こんな鹽梅ならば、まあ結構だと思つて、新さん、あなたの處へおたよりをするのにも、段々快い方ですからお案じなされないやうに、然ういつてあげましたつけ。

さうすると、つい先月のはじめにねえ、少しいつ

もより容子が悪くおんなすつたから、急いで醫者に診せましたの。はじめに行つた時は、何でもなかつたんですが、二度目ですよ。二度目にね、新さん、一緒にお醫者様の處へ連れて行つてあげた時、まあ、何うでせう。」

高津はぢつと予を見たり。膝にのせたる掌の指のさきを動かしつゝ、

「彼處の、あればかりの石垣にお弱んなすつて、上の壇が一段、何うしてもあがり切れずに呼吸をういて在らつしやるのを、抱いて上げた時は、私も胸を打たれたんですよ。」

まあ可い、可い！ こゝを的に取つて看病しよう。こん度来るまでにはきつと獨でお上んなさるやうにして見せよう。さうすりや素人目にも快くおんなすつた解りが早くつて、結句張合があると思つたんですが、もうお醫者様へ行らつしやることが出来たのは其日ツ切。新さん、矢張りいけなかつたの。

お醫者様はともいけなかつて云ひました、新さ

ん、私やぢつと堪へて居たけれどね、傍に居た老年の婦人の方が深切に、（お氣の毒様ですねえ。）といつて呉れた時は、もうとても我慢が出来なくなつて泣きましたよ。薬を取つて溜へ行ツちや、笑つて見せて居たけれど、どんなに情なかつたでせう。様子に見せまいと思つても、ツイ胸が迫つて来るもんですから、合乗で歸る道で私の顔を御覽なすつて、

（何だねえ、何うしたの、妙な顔をして。）と笑ひながらいつて、憎らしいほどちやんと澄して在らつしやるんだもの。氣分は確だし、何にも知らないで、と思ふとかはいさうで、私やかはいさうで。

今更ぢやないけれど、こんな氣立の可い、優しい、うつくしい方がもう亡くなるのかと思つたら、ねえ、新さん、いつもより百倍も千倍も、優しい、美しい、立派な方に見えたらうぢやありませんか。誂へて拵へたやうな、かういふ方がまたあらうか、と可憐もので。可憐もので。大事な姉さんを一人、もう、何うしようと、我慢が出来なくなつてね、車が石の上



へ乗つた時、私やソツと抱いて見たわ。」とぞ微笑たる、目には涙を宿したり。

「僕は何だか夢のやうだ。」

「私だつて眞個にやなりません位ひどくおやつれなすつたから、ま、今に覽てあげて下さいな。」

電報でもかけようか、と思つたのに。よく早く出て来てね。始終上杉さん、上杉さんツていつて在らつしやるから、何んなにか喜ぶでせう。しかしね、急にまたお逢ひなすつちや激するから、そツとして、いまに目をおさましなすツてから私がよくさういつて、落着かしてからお逢ひなさいましょ。腕車やら、汽車やらで、新さん、あなたもお疲れだらうに、すぐこんなことを聞かせまして、もう私や申譯がございません。折角お着き申して居ながら、何うしたら可いでせう、堪忍なさいよ。」

## 菊の露

「もう／＼思入こゝで泣いて、ミリヤアドの前ぢや、かなしい顔をしちやいけません。そつとして置いてあげないと、お醫師が見えて、私が立廻つてさへ、早や何か御自分の身體に異つたことがあるのかと思つて、直に熱が高くなりますからね。」

それではなくツてさへ熱がね、新さん四十度の上あ  
るんです。少し下るのは午前のうちだけで、もうお  
ひるすぎや、夜なんざ・夢中なの。お薬を頂いて、  
それでまあ熱を取るんですが、日に四度ぐらゐづゝ  
手巾を絞るんですよ。酷いぢやありませんか。それ  
で居て痰がかう咽喉へからみついてゝ、呼吸を塞ぐ  
んですから、今ぢや、ものもよくは言へないんでね、  
私に話をして聞かしてと始終さういつちやあね、詰  
らないことを喜んで聞いて在らつしやるの。

何んなにか心細いでせう。寝たつきりで、先月の  
二十日時分から寝返りさへ容易ぢやなくツて、片寝  
でねえ。耳にまで床ずれがしてますもの。夜が永い  
のに眠られないで悩むのですから、何んなに辛いか

わが分りません。話といつたつてねえ、新さん、酷く神  
經が鋭くなつて、もう何ですよ、新聞の雑報を聞  
かしてあげても泣くんですもの。何かねえ、小鳥の  
事か、木の實の話でもツておつしやるけれど、何う  
いつていゝのか分らず、栗がおツこちるたつて、私  
や縁起が悪いもの。いひやうがありません。それで  
なければ、治つてから片瀬の海濱にでも遊びにゆく  
時の景色なんぞ、月が出て居て、山が見えて、海が  
凪いて、みさごが飛んで、さうして、あゝするとか、  
かうするとかいつて、聞かせて、といひますけれど、  
ね、新さん、あなたなら、あなたならば男だからい  
へるでせう。いまにあなた章魚に灸を据ゑるとか、  
蟹に握飯をたべさすとかいふ話でもしてあげて下さ  
いまし。私にや、私にや、何うしてもあの病人をつ  
かまへて、治つて何うしようなんていふことは、情  
なくツて言へません。」  
といふ聲もうるみにき。

「え、新さん、はなせますか、あなただつて困る  
でせう。耳が遠くおんなすつたくらゐ、茫として  
在らつしやるのに、悪いことだと小さな聲でいふの

が遠くに居てよく聞えますもの。

せい／＼ツてね、痰が咽にからんでますのが、いかにもお苦しさうだから、早く出なくなりますやうにと、私も思ひますし、病人も痰を咯くのを楽しみにして在らつしやいますがね、果敢ないぢやありませんか、其が、血を咯くより、なほ、酷く悪いんですとさ。

それで居てあがるものはといふと、牛乳を少しと、鶏卵ばかり。熱が酷うござんすから舌が乾くツて、とほし、水で濡して居るんですよ。もうほんとうにあはれなくらゐおやせなすつて、菊の露でも吸はせてあげたいほど、小さく美しくおなりだけれど、ねえ、新さん、さうしたら身體が消えておしまひなさうかと思つて。」

といひかけて咽泣き、懷より桃色の絹の手巾をば取り出でつゝ目を拭ひしを膝にのして、怨めしげに膽りぬ。

「新さん、手巾でねいゝ汗を取つてあげるんですかね、そんなに弱々しくおなんなすつた、身體から

絞るやうぢやありませんか。眞個に冷々するんですよ。拭くたびにだん／＼お顔がねえ、小さくなつて、頸ン處が細くなつてしまふんですもの、ひどいねえ、私やお醫者様が、口惜くツてなりません。

だつて、はじめツから入院さしたツて、何うしたツて、いけないツて見離して居るんですもの。今ン處ぢや唯もう強いお藥のせゐで、やう／＼持つて居ますんですとね、ね、十滴づゝ。段々多くするんですツて。」

青き小き瓶あり。取りて持返して透したれば、流動體の平面斜めになりぬ。何ならむ、この藥、予が手に重くこたへたり。

「ぢつとみまもれば心も消々になりぬ。」

其口の方早や少しく減じたる。其をば命とや。あまり果敢なさに予は思はず眩きぬ。

「たツたこれだけ、百滴吸つたらなくなるでせ

う。」

「いえ、また取りに参ります」

といひかけて顔を見合せつゝ、高津はハツと泣き  
伏しぬ。あゝ、悪きことをいひたり。

秀を忘れよ

「餘り何だものだから、僕はつい、高津さん氣に  
かけちゃ不可い。」  
「いゝえ、何にもそんなことを氣にかけるやうな、

新さん、容體ならいゝけれど。」

「何うすりや可いのかなあ。」

唯といきのみつかれたる、高津はしばしものいはざりしが、

「何うしようにも、しやうがないの。唯ねえ、せめて安心をさしてあげられりや、ちつとは、新さん何だけれど。」

と予が顔を打まもれり。

「其が何うすりやいゝんだか。」

「さあ、母様のことも大抵いひ出しはなさらなし、他に、別に、かうといつて、お心懸りもおあんなさらないやうですがね、唯ね、始終心配して在らつしやるのは、新さん、あなたの事ですよ。」

「僕を。」

「ですから何うにかして氣の休まるやうにしてあげて下さいな。心配をかけるのは、新さんあなたが、悪いんですよ。」

「え。」

「あのね、始終さういつていらつしやるの。」

（私が居る内は可いけれど、居なくなると、上杉さんが何んなことをしようも知れない）ツて。」

「何を僕が。」

予は顔の色かはらずやと危ぶみしばかりなりき。  
背はひたと汗になりぬ。

「いゝえ、眞個でせう、眞個に達ひませんよ。それに違ひないお顔ですもの。私が見ましてさへ、何ですか、いつも、もの思をして、うつら／＼として在らつしやるやうぢやあかませんか。誠にお可哀相な様ですよ。ミリヤアドも然ういひましたつけ。

（私が慰めてやらなければ、あの兒は何うするだらう） ツて。何もね、秘密なことを私が聞かうぢやありませんけれど、なりますことなら、ミリヤアドに安心をさしてあげて下さいな。え、新さん、（私が居さへすりや、大丈夫だけれど、何うも案じられて。）とおつしやるんですから、何とかしておあげなさいな。あなたにや其工夫があるでせう、上杉さん。」

名を揚げよといふなり。家を起せといふなり。富の市を憎みて殺さむと思ふことなかれといふなり。ともすれば自殺せむと思ふことなかれといふなり。詮ずれば秀を忘れよといふなり。其事をば、母上の



御名をんなにかけて誓ちかへよと、常つねに、ミリヤアドのいへる  
なりき。

予よは黙もくしてうつむきぬ。

「何もね、いまといつていま、あなたに迫せまるんぢ  
やありません。何どうぞ悪わるく思おもはないで下くださいまし、  
しかしお考かんがへなすツてね。」

また顔見かほみたり。

折をりから咳入せきいる聲聞こゑきこゆ。高津たかつは目くぼせして奥おくにゆ

きぬ。

良よありて、

「ぢや、お逢あひ遊あそばせ、上杉うへすぎさんですよ、可ようご

ざんすか。」

といふ聲こゑしき。

「新しんさん。」

と聞きこえたれば馳はせゆきぬ。唯見とみれば次つぎの室まは片付かたづ  
きて、疊たぐみに塵ちりなく、床花とこはな瓶いけに菊きく一輪いちりん、いつさしすて  
しか凋しをれたり。

《ひがしまくら東枕

襖ふすま左右さゆうに開ひらきたれば、厚あつ衾ふすま重かさねたる見みゆ。東ひがしに向むけて臥床ふしどまつ設まけし、枕頭まくらもとなる皿さらのなかに、蜜柑みかんと熟じゆくしたる葡萄ぶどうと装もりたり。枕まくらをば高たかくしつ。病やめる人ひとは頭埋かしづめて、小ひちやかにぞ臥ふしたりける。

思おもひしよりなほ瘠やせたり。頬ほのあたり太いたく細ほそりぬ。眞白ましろうて玉たまなす顔かほ、兩あめの脛まふたに血ちの色染いろそめて、うつくしさ、氣高けだかさは見みまさりたれど、あまりおもかげのかはりたれば、予よは坐すわりもやらで、襖ふすまの此方こなたにイみつゝ、みまもりてそれを、ミリヤアドと思おもふ胸むねは先まづふたがりぬ。

「さ、」

と座蒲團ざぶとん差さよせたれば、高津たかつとならびて、しを／＼と座ざにつきぬ。

顔見かほみば語かたらむ、わが名呼なよばれむ、と思おもひ設まつけしはあだなりき。

寝返ねがへることだに得えせぬ人ひとの、片手かたての指ゆびのさきのみ、少すこしく衾ふすまの外そとに出いだしたる、其手そのての動うごかむともせず。

瞳キト据りたれば、わが顔見られむと堪へずうつむきぬ。ミリヤアドとばかりもわが口には得出でなむ、強ひて微笑みしが我ながら寂しかりき。

高津の手なる桃色の絹の手巾は、はらりと掌に廣がりて、軽く、ミリヤアドの目のあたり軾ひたり。

「汗ですよ、熱がひどうござんすから。」

頬のあたりをまた拭ひぬ。

「分りましたか、上杉さん、ね、ミリヤアド。」

「上杉さん。」

極めて低けれど忘れぬ聲なり。

「こんなになりました。」

とやゝありて切なげにいひし一句にさへ、呼吸は三たびぞ途絶えたる。晝中の日影さして、障子にすきて見ゆるまで、空蒼く晴れたればこそ慙くてあれ、暗くならば影となりて消えや失せむと、見る目も危ふく要れしかな。

「切なうござんすか。」い、ミリヤアドは夢見る顔なり。

「耳が少し遠くなつて在らつしやいますから、そのおつもりで、新さん。」

「切なうござんすか。」  
「頷く状なりき。」

「まだ可いんですよ。晩方になつて寒くなると、あはれにおんななさいます。其上熱が高くなりますからまるで、現。」

と低聲にいふ。かゝるものをいかなる言もて慰むべき。果は怨めしくもなるに、心激して、

「何うするんです、ミリヤアド、もうそんなで居て何うするの。」

聲高にいひしを傍より目もて叱られて、急に、

「何ともありませんよ、何、もう、いまによくなります。」

いひなほしたる接穂なさ。面を背けて、

「治らないことはありません。治るよ、高津さん。」

高津は勢よく、

「はい、それはあなた、神様が在らつしやいます。」

予はまた言はざりき。

誓ちかひ

月凍つきいてたり。  
大路おほぢの人の聲こゑ音ね牙とえし、  
それそれも時過ときす  
ぎぬ。坂下さかしたに犬いぬの吠ほゆるもやみたり。  
一ひとしきり、一ひと

しきり、檐のきに、棟むねに、背戸せとの方に、颯さつと来て、さら／＼さら／＼と鳴る風かぜの音おと。此この風こがらし！ 病やむ人ひとの身みを如何いかんする。ミリヤアドは衣きぬ深く引被ひきかぐ。恚かくは予よと高たか津つとに寝ねよとてこそするなりけれ。

かゝる夜よを伽とぎする身みの、何なにとて二人ふたりの眠ねむらるべき。此こなた方も唯たゞ眠ねむりたるまねするを、今いまは心安こころやすしとてや、ミリヤアドのやゝ時ときすぐればソと顔かほを出いだして、あたりをば見みまはしつゝ、いねがてに明あけを待まつ優やさしき心こころづかひ知りたれば、其その夜よもわざと眠ねむるまねして、予よは机つくえにうつぶしぬ。

搔かきまき卷まきをば羽織はらせ、毛布ケット引ひかつぎて、高津たかつは予よが裾すそに背向せなむけて、正たゞしう坐すわるやう膝ひざをまげて、横よこにまくらつけしが、二ふたツ三みツものいへりし間に、これは疲つかれて轉うつ寝ねせり。

何なになりけむ。ものともなく膚はだあはだつに、ふと顔かほをあげたれば、ありあけ暗くらき室しつのなかに、ミリヤアドの雙ささの眼め、はきとあきて、わが方かたを見詰みつめ居ゐたり。

予が見て取りしを彼方にもしかと見き。ものいふ如き瞳の動き、引寄するやうに思はれたれば、搔卷は勿ねのけて立ちて、進み寄りぬ。

近よれといふ色見ゆ。

やがて其前に予は手をつきぬ。あまり氣高かりし状に恐しき感ありき。

「高津さん。」

「少し休みましたやうです。」

「さう。」

とばかりいきをつきぬ。良久しうして、

「上杉さん、あなた何うします。」

予は思はずわなゝきぬ。

「何を、ミリヤアド。」

「私なくなりますと、あなた何うします。」

涙ながら、

「そんなことおつしやるもんぢやありません。」

「いゝえ、何うします。」と強くいへり。

「そんなことを、僕は知りません。」

「知らない、いけません、みんな知つて居る。か

はいさうで、眠られませんか。眠られませんか。上杉さん、私、頼みます、秀、秀。」

予は頭より氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影いと幽に、ミリヤアドが目光さしたり。

「秀さんのこと思はないで、勉強して、ね、上杉さん。」

予は伏沈みぬ。

「かはいさう、かはいさうですけれども、私こんな、こんな、病氣になりました。仕方がない、あなた何うします。かはいさうで、安心して死なれませんか。苦しい、苦しい、かはいさうと思ひませんか。私、あなたをかはいがりました。私を、私を、かはいさうと思ひませんか。」

一しきり、また風の戸にさはりて、ミリヤアドの顔蒼ざめぬ。其眉顰み、唇ふるひて、苦痛を忍び瞼を閉ぢしが、十分時過ぎと思ふに、ふとまた明らかに二けり。



「肯きませんか。あなた、私を何と思ひます。」  
と切なる聲に怒を帯びたる、りゝしき眼の色恐しく、射竦めらるゝ思あり。

枕に沈める横顔の、あはれに、貴く、うつくしく、  
氣だかく、清き芙蓉の花片、香の煙に消ゆよとばかり、  
亡き母上のおもかげをば、まのあたり見る心地しつ。  
いまはハヤ何をかいはむ。

「母上。」

と、ミリヤアドの枕の許に僵れふして、胸に縫りてワツと泣きぬ。

誓へとならば誓ふべし。

「何卒、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しません。」

ミリヤアドは目を塞ぎぬ。また一しきり、また一しきり、刻むが如き戸外の風。

予はあわたゞしく高津を呼びぬ。二人が掌左右より、ミリヤアドの胸おさへたり。また一しきり、また一しきり、大空をめぐる風の音。

「ミリヤアド。」

「ミリヤアド。」

目はあきらかにひらかれたり。また一しきり、ま  
た一しきり、夜深くなりゆく風の風。

神よ、めぐませたまへ、憐みたまへ、亡き母上。

【誓之卷・完】